

編集後記

新たに第 12 期の日本農学アカデミーの活動が開始いたしました。今期の会報第 1 号となる通算 38 号においても、農学ならではの幅広く奥深い議論をお届けすることができました。

今回、会報の公開が遅くなったことをお詫びいたします。ただ、それでもこのタイミングで公開できたのは、新会長の生源寺先生をはじめ、執筆された先生方のご協力の賜物であり、ここにあらためて御礼申し上げます。

さて日本農学アカデミーは設立趣意書にある通り、日本学術会議における農学分野の支援を念頭におきながら活動を続けてまいりました。その日本学術会議をめぐるいくつか動きがありましたので、会員の一人として、以下簡単にご報告いたします。

その日本学術会議は 2020 年 10 月の会員任命問題をきっかけにして組織と活動の在り方について自ら検討を行い、「[日本学術会議のより良い役割発揮に向けて](#)」(2021 年 4 月 22 日)を決定し、具体的な取り組みを進めてきました。それに対して政府からは、昨年 12 月 6 日に内閣府「[日本学術会議の在り方についての方針](#)」が発出されました。日本学術会議はこれを受けて、12 月 8 日と 21 日に総会を開催し、「[声明：内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」\(令和 4 年 12 月 6 日\)について再考を求めます](#)」を議決して、公表したところです。その後追加して公表された「[内閣府『日本学術会議の在り方についての方針』に関する懸念事項\(第 186 回総会による声明に関する説明\)](#)」に補足説明があります。

なお、これらの検討の途中で担当大臣からの質問に答える形で、「[科学者コミュニティからの研究インテグリティに関する論点整理](#)」【改訂版】(2022 年 7 月 25 日)が公表されました。これまでの「研究公正」の観点からの「研究インテグリティ」の議論を大きく超えて、新興科学技術の生み出す知識の適切な管理のあり方について検討し、「研究インテグリティ」を「研究活動のオープン化、国際化が進展する中で、科学者コミュニティが、資金や環境、信頼等の社会的負託を受けて行う研究活動において、自主的・自律的に担保すべき健全性と公正性及び、そのための、透明性や説明責任に関するマネジメント」として定義し、取り組むための論点を提示しています。新興科学技術としては AI や量子科学技術が目立ちますが、生命科学技術や海洋科学技術など農学・食料科学分野に関連する重要領域もここに含まれていることから、この議論を今後も注視していくべきと考えております。

日本学術会議のホームページ (<https://www.scj.go.jp/>) に一連の文書が掲載されておりますので、ご覧いただければ幸いです。(中嶋康博)